
死体コレクター 4

エビのしっぽ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

死体コレクター4

【Nコード】

N0291B

【作者名】

エビのしっぽ

【あらすじ】

私は、真実を知りたいだけ。僕は、集めたいだけ。ただ、それだけ。

（前書き）

前作を読んでもくださった方、感想を書いてくださった方、本当にありがとうございます。それこそがわたくしの活力であります。さて、今回、長めです。脳、フル活動です（笑）。

.....眠い。

瞼を開けて、窓の外を見る。

空にはすでに、高々と太陽が昇っている。

いつのまにか眠ってしまったようだ。

目の前のノートパソコンに視線を向ける。

『都内で相次ぐ謎の連続失踪事件について』

これが徹夜の原因だ。

ここ3〜4年の間に、同じ地域で、何人もの行方不明者がでていた。

4年間に19人。これは明らかに異常な数字だった。

このうち2人は、家出と、借金を苦にした自殺であった。

しかし、それを差し引いても17人。そのどれもが原因不明で、所持品すら見つかっていなかった。

失踪者は全員女性だが共通点は無く、年齢にもばらつきがあった。

女子高生もいれば20代後半の女性もあり、生活環境や出身地もまったく関連のないことから、同一の事件とは考えにくかった。

なにより死体が見つかっていないので、家族が訴えても、警察は、まるで相手にしなかったようだった。

しかし私は、これらの出来事にとっても興味をそそられたのだった。この17人には絶対に、なにかある。

記者の血が騒ぐ。

調べてみたい。

真相を突き止め、このことを記事にしたい、と思った。

今日も素晴らしい天気だ。停車したままの外車の運転席から、空を眺める。しばらくして、後部座席に女が乗り込んで来た。

「支社までお願い。」

少し強めの口調で女が言う。今日は少々機嫌が悪いようだ。

「今日は本社じゃないんですか？」

「いいのよ。 に行つて頂戴。」

さらに強めに女が答える。やはり機嫌が悪いようだ。これ以上口

応えするのは良くない。

「わかりました。」

僕は車を走らせた。

女は、電話相手に少し怒鳴り気味に喋っている。おそらく本社の重役、もしくは支社長だろう。さすがは実力主義の敏腕女社長だ。その運転手をしている僕は、もしかするとけっこうな立場なのかも知れない。

ミラー越しに女を観察する。

三十代前半。なかなか整った顔立ちをしている。

全国にある支社をまとめ上げる女社長。

僕の交際相手。

…そして、僕が『まだ持っていない肉体』。

いずれ手に入れる。

いずれだ。

「今日は散々だわ。」 女は言う。

「そういう日もありますよ。」
相槌をうつ。

「私って、冷たい女なのかしら。」
女のテンションが下がる。

「社員の一部が、私のことを『鉄女』とか『女王』とか陰口を言っているようなの。」

…まあ、無理もない。優しい口調なのは僕の前だけで、ほかの人には厳しい。鉄女と言われても仕方がない。

しかし、正直に言うことはできない。

「確かに、中にはそんなことを言う社員もいるかもしれませんが、本当に会社のことを考えている人なら、社長のことをわかってくれると思いますよ。」

少し黙ってから女が言う。

「あなたはどっちかしら？」

「言わなきゃいけませんか？」

支社に着くと、彼女は少し上機嫌で車を出ていった。

「また後でね。」

別れ際に女は言った。

……そう。またあとで。

その時こそ、彼女は僕の『コレクション』に加わるのだ。

気がつくと、誰もいない車内で、僕は静かに笑っていた。

失踪した女性たちの自宅付近の聞き込み始めて数日後、失踪した中の一人が、いなくなった当日に居酒屋に行っていたことを突き止めた。

居酒屋の主人が、彼女に話し掛けていた男を目撃していた。

男は、彼女と3時間ほど会話したあと、彼女と一緒に店を出ていったという。「どんな話をしてましたか？」

「確か：女の子のほうが一方向的に喋ってたかな。男の子のほうは相槌うちながら、ずっと話聞いているだけだったよ。」

「ほかには何か言っていました？住んでる場所とか、趣味とか。」

「ああ、そっぴや男の子が『家から海が見えるんですよ』とか言っ
てたかな。
あとは、『僕には人とは違う趣味があるんだ』とか女の子に話し
てたよ。」

…海。

この辺りだと湘南だろうか。 きっと、彼女を家に連れて帰った
に違いない。

とりあえず明日は湘南へ向かってみることにしよう。

…必ず見つけてやる。

残念だ。とても残念だ。

結局、あの後彼女は家には来ることはなかった。
やはり社長というのは忙しいのだろう。
彼女もとても残念そうで、何度も謝っていた。

まあいい。今日のところは諦めておこう。

僕の『趣味』に加えるのは、また次の機会だ。

…さて、

今日の所は『集める』のを我慢して明日にそなえて眠りにつくか
…。

…それとも…、

僕の目に叶う、『コレクション』を捜しに行くか…。

この葛藤する時間も、僕の『趣味』の愉しみのひとつ。

翌日、私は湘南を訪れた。

居酒屋の主人の話で、大方の人物像がわかった。

痩せ型、背が高く、髪は黒。

身なりがよく、清潔感漂い、気品がある。

年齢はおそらく二十代で、真面目で優しそうな感じ。男前。

そして、海に見える家に住んでいる。

ここまでわかっていれば、すぐに見つけることができるだろう。

ここまでよくできた人物はなかなかいないし、何より私は記者なのだから。

その人物の自宅は、思っていたよりずっと早く見つかった。

男は、近所でも風当たりのよい、好青年だったからだ。

男前で好青年、しかも有名大企業の社長専属の運転手。どれをとっても完璧である。

私は、今更ながらに思った。

本当にこの男が事件に関係しているのだろうか、と。

とにかく、全て本人に会ってからだ。
もうすぐ男が帰ってくる。

真実がわかるのは、その時だ…。

帰宅してみると、玄関の前に見知らぬ女性が立っていた。

女は記者だと言った。

一瞬僕は身構えたが、冷静になり、彼女を家に招き入れることにした。

よく見ると、僕の手に入れていない『軀』だった。

彼女をリビングに案内しながら、僕は心の中で興奮していた。

本当に彼が事件に関わっているのかしら？

さつきも、記者だと名乗っても身じろぎひとつしなかったし、私をすんなり家に招き入れてくれた。

彼は想像していたよりも物腰がやわらかく、本当に好青年で、見るからに優しかった。

失踪事件の重要人物でなければ、付き合いたいぐらいだ。

しかし私情は禁物。

私は毅然として、彼に質問を投げかけた。

「数力月前、
という居酒屋に行きましたね？」

「はい。」

「そこで、町田 嘉代子という女性に会いましたね？」

「…ああ。はい。」

「そのあと、彼女をどこへ連れて行ったんですか？」

「ここです。」

「それで？どうしたんですか？」

「そのままですよ。」

「……は？」

「そのまま。『彼女』はここにいますよ。」

「どこですって？」

「ここです。地下。」

私は何を言っているのかわからなかった。

「どういふことですか？」

「口で言うより、見る方が早いですよ。
見ますか？」

なんのことかわからないが、そこに彼女が住んでいるのだろうか。

しかし、何故地下に…。

私は、不審に思いながらも、彼について行くことにした。

真実を知るために…。

地下室への道は暗く、心なしか寒かった。

…真夏だというのに。

「ここです。」

その扉はいかにも頑丈そうで、潜水艦の水密扉を思わせた。

「どうぞ。」

そう言われて、私は扉に手をかけた。

低くうめく取手。

そして…、扉が開いた。

中は薄暗かったが、そこに置かれている物が何かは、良くわかった。

戦慄。

悲鳴。

後頭部への、衝撃。

そうして私は、この住人となった。

ここは暗くて寒いけど、寂しくはない。

トモダチがたくさんいるから。

向かいに座る『三体目』を見つめながら、

彼女は思った。

朝。

僕は目覚める。 今だに僕は、満足感で心がいっぱいだ。

シャワーを浴びてバスルームから出ると、携帯に電話がかかる。

「はい…。あ…社長。」

「今夜だけど、空いてるかしら？」

「はい、大丈夫です。」

「じゃ、今夜家へ行くわね。」

「はい。たのしみにしてますよ。」

「私も。愛してるわ。」

僕の『趣味』は、
まだまだこれからだ。

朝食を食べながら窓の外を見る。

雲ひとつない、青空。

いつのまにか、僕の顔はかすかに笑っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0291b/>

死体コレクター 4

2010年12月13日22時59分発行